

聯璧の詩<sub>うた</sub>

藤田眞実

空が白んできた。

彼女は薄れゆく意識の中でそう独白する。僅かにでも体を動かす力すら最早残ってはいない。霞みつつある視界の端に、東の方から見え始めた微かな光を捉えるだけで、今の彼女には限界だと言えた。

何もかもが遠い。

時が経つにつれて、全ての感覚が無くなっていくのが分かる。薄汚れて擦り切れてしまった襖では、冷たい外気から我身を守る事など儘ならない。荘厳な社祠を目前に横臥したまま、彼女は乾いた唇を小さく動かした。徐々に思考が鈍くなり、呼吸をする事さえ億劫に感じてしまう。しかし彼女には、胸に抱いた確固たる一つの思いがあった。

どうか——どうか、この子を。

喉が塞がった様に感じて、彼女は噎せて咳き込んだ。ひゅうひゅうという不快な音が唇の間から漏れ聞こえ、鉄の味がじんわりと口内に広がる。嗚呼、もう長くはもたない様だ、と彼女は薄ら自覚する。けれど彼女は双眸で社の拜殿を見遣りながら、己の腹に

手を宛てがい声にならない声を紡いだ。

たとえ土芥の様な命であったとしても、それでも、此の命だけは諦められない。

どうか、と掠れた声で呟いて、彼女は耳奥でぷつりと糸が切れる様な音を聞いた。墨を一滴垂らしたかの様に、視界に黒い濁りが拡がっていく。徐々に浸食されていく感覚。段々と消滅していく心象。辛うじて残っていた気力さえも使い果たしてしまったかの様に、彼女はゆっくりと瞼を閉じた。

深い渾沌、だった。

少女は唯其処に立ち尽くして、唯辺りの情景を眺めている。天地が混ざり合った、清濁の別も無い、果ての無い渾沌。一切の境界が無いという事は詰まり、全でありながらも無に等しい。少女は一つ瞬きをする、何に對してという事もなく、眼前の虚無に向かって、ふう、と吐息を吹き掛けた。

世界は動き続ける。留まる事を知らない。故に、此の渾沌も滞留している訳ではなかった。

変化は何時も決まって分離という形で訪れる。清麗たるものは上昇し、沈濁は下に残され、天と地が分離し、光と闇が離隔する。

つ、と、少女は片腕を自身の前に向かつて突き出した。それから白く細い指で宙を切り、目前に立ち込める霧を消し去るかの様に腕を払う。天地は乖隔され、清濁は峻別される。少女はその間、光と闇に挟まれたところに独り立ち、硝子の様な瞳で辺りの情景を眺めていた。

+ + +

ひゅん、と風を切る音を耳元で聞いて、青年は顔を擧めて背後を振り返った。視線を遣った先には想像した通りの見知った顔がある。それを確認した青年は、軽く溜息を漏らして突然の来訪者に声を掛けた。

「人を弓的にするな阿呆。死んだらどうする」

青年が立っているのは、都の様子が一望出来る丘の上だった。そして、青年の直ぐ隣には背の高い立派な木が立っている。その太い幹に刺さっている矢を引き抜きながら、青年は侯鶴にされた事を咎めて言った。すると矢を放った当人は青年の方に歩み寄り、澄ました顔で青年の手から矢を抜き取った。

「別にはしてないよ。私はちゃんと逸らしたものだ。それとも、諭鶴はこれくらいで死ぬ程愚鈍だった？」

「何だその言草は。全く、紫蘭しらんのふてぶてしさは相変わらずだな」

「ふてぶてしいのは論鶴の方でしょ。さっき民会の議場を出たところで長老達が話してるのを聞いたの。また喧嘩売ってきたみたいだね。よくもまあ懲りないなあ、って寧ろ感心させられる」

わざとらしく肩を竦めて見せる昔馴染み——紫蘭の言葉に、論鶴はむっと眉根を寄せらる。しかし確かに、彼女が言う様な状況を作ってしまったのは自分かもしれない、という心当たりはあった。

「あれは別段喧嘩を売った訳じゃない。長老達が頑迷固陋で、俺の事が気に入らないだけだ」

「で、そうやって何時も長老達の機嫌を損ねてくる訳でしょ？もうちょっと上手くやれないかなあ」

「そんな悠長な事は言ってもらえない。前線の戦況を何も知らない奴等に舵取りを任せられるか」

論鶴は苦々しげな口調で言い切った。すると、論鶴の言を聞いた紫蘭は先程までとは

打って変わって柔らかい表情を湛え、口元に優しい笑みを浮かべながら論鶴の双眸を覗き込んだ。

「大丈夫。私はちゃんと分かっている。論鶴は独りじゃないよ。私も出来る限りの事はする。論鶴は何も恥じる事なんてないんだから。ただね、あんまり論鶴が一人で何でもしようとするから、ちょっと苛立ってただけ」

「……何だそれは」

「だって論鶴が私の事頼らないんだもの。思わず怒っちゃっても仕方ないでしょ」

「紫蘭は大概滅茶苦茶だな」

「今更気付いたの？」

言いながら紫蘭はくすくすと笑う。対する論鶴は紫蘭の言葉に呆れた様な顔をしたが、紫蘭の軽やかな笑い声につられて、ふっと小さく笑みを零した。

そうだ、今更だった、と論鶴は思う。紫蘭の言動は論鶴に予測出来る範囲を疾うに超越していて、何度と無く彼女は論鶴の事を驚かせる。

何時の事だったか、以前紫蘭に「もっと私を使えば良い」と言われた事を思い出す。どういう意味かと論鶴が問うと、紫蘭は晴れやかに笑いながら言ったのだ。もっと私を利用すれば良い、そうでないと論鶴が私の傍に居る意味がない、と。

「あ。そうだ、論鶴」

はたと何か思い出したかの様に紫蘭が声を上げる。ん、と論鶴が先を促す様に息を漏らすと、紫蘭は要点だけを伝える為に短く返した。

「——御託宣があった」

理由なんて要らない、唯其処に居てくれれば良い。誰よりも何よりも彼女の事を信頼しているのだから。

そんな言葉は、未だ、伝えられていないまま。

三方を山に囲まれ、残る一方は海に面している都は、整備された平坦な道が張り巡らされている。中央を走る川は人々にとって重要な水源となっていて、此の都での暮らしから切っても切り離せないものである。

都は広大で、華麗だ。戦時中にも関わらず人々の往来が激しいのは、正に国力の表れだと言えるだろう。市が開かれれば常に賑わい、たちまち喧噪が辺りに満ちる。この日常の風景を疑う事など、恐らく此処に生きる人々はしていないのだろう。唯、一部の者を除いては。

「<sup>すず</sup>珠洲お祖母様、紫蘭が参りました」

紫蘭は言って床に膝を付き、両手を胸の高さで組み合わせて頭を下げる。やや後ろに控えている論鶴も同じ様に頭を垂れ、しんとした空気を肌にしぐりと感じながら、そのまま動きを止めて声が掛けられるのを待った。

「お入りなさい」

紫蘭の眼前、閉じられた戸の向こうから柔らかい声が聞こえた。続いて丹塗の戸が内

側からゆっくりと開かれる。紫蘭は音を立てず静かに立ち上がり、視線を下げたまま室に入る。諭鶴は黙して拝したまま動く事をしなかった。

二人が今居るのは、社祠の拜殿を奥に進んだ所に位置する、重厚な雰囲気を感じている本殿である。此処に立ち入る事が許されるのは極一部の者だけであり、諭鶴が証文も無く来訪しても咎過とならないのは、紫蘭を伴っているからに他ならない。いや、この場合は紫蘭が諭鶴を伴っていると云った方が正しいか。何れにせよ、諭鶴が単独で訪れたとしても、足を踏み入れる事は適わない場所である。

「紫蘭、そろそろ貴方が来るだろうと思って待っていましたよ。さあ、此方にお座りなさい」

「はい。失礼致します」

紫蘭は再び深々と一礼してから、視線を上げずに室の中央部へと歩み入る。爪先から二尺程先をじっと見ながら滑る様に進み、用意されていた褥の上に腰を下ろした。赤地に模様を縦に織り出した、縹緗縁の畳から馨しい香りが漂う。紫蘭はそこで深く息を吸

うと、さっと顔を上げて目前を見据えた。

「御尊顔を拝し奉り光栄に存じます。御祖母様、お変わりは御座いませんか」

「ええ、私は息災ですよ。有難う。……用件は分かっています。其方の方も中にいらっしやう」

社の主——珠洲は微笑みながら諭鶴の方に声を掛けた。紫檀塗の倚子に腰掛けているこの媪は、実は紫蘭の祖母ではなく従祖母に当たる人物だ。何れにしても、本来ならば諭鶴は直接言葉を交わせる様な立場にはない。諭鶴は床に膝を付いたまま深々と頭を垂れた。

「その様な。私は姫宮様に随伴させて頂いているだけで御座いますので」

「ですから尚の事。随伴などといって、貴方は何時も紫蘭に振り回されているのですよ。この子は些か……いいえ、とても自由奔放な子ですから、私はその御礼をして差し上げねばなりません。さあ、いらっしやう」

ふふ、と珠洲がからかう様に笑うのを認め、紫蘭は極まりが悪そうに、お祖母様、と

言いながら肩を窄める。そんな紫蘭の様子に論鶴も思わず口元を緩め、それではお言葉に甘えまして、と一礼してから室に足を踏み入れた。

此処だけ流れる時が違う様だ、と論鶴は思う。そう感じてしまう程に、何やら奇妙な感があった。

「さあ、それでは二人の望みに応えてあげましょう」

論鶴が本殿の中に踏み込んだのを確認すると、珠洲は物腰柔らかに立ち上がって、一歩ずつ紫蘭の方へと近寄る。長い領巾と褶がさらりと簀子の上を滑る音が耳に届く。紫蘭がふと論鶴に視線を遣ると、論鶴はそれに気が付き、紫蘭に向かって一つ頷く。紫蘭もそれに頷き返して答えると、今度はじつと珠洲を見据えた。

するり、するり、と歩が進められる。どれだけ月日が経とうと変わらないしなやかな動き。滑らかで、穏やかで、紫蘭は褥の上に坐したまま珠洲に目を遣る。

そして、その口が開かれた。

+ + +

少女は独り、詩を紡ぐ

その声を聞く者は誰一人としておらず、その姿を見る者も存在しない。況してや、彼女に同調出来る者などいる筈も無かった。それでも少女は休む事無く唇を動かし続ける。まるでそれが何者かに課せられた義務であるかの様に、彼女は只管言の葉を音に乗せていた。

少女は独り、鏡に見入る。

眼前に在るのは漆塗りの鏡台と、それに紐で結び下げられている鏡だ。丁度少女の顔

と同じくらいの大きさをした鏡は、その中に此の世のあらゆるものを映し出す。鏡に映る情景が彼女の詩になるのか、彼女の詩が鏡に映る情景となるのか。それは彼女にさえも分からない。けれど彼女は鏡を見詰める。硝子の様なその双眸で。

少女は独り、吐息を漏らす。

一度たりとも独りでなかった事などない。彼女にとっては自己が全てであり、孤独こそが日常であった。日々機を織っていく様に、経糸と緯糸を組み合わせていく様に、詩を口遊み月日が過ぎ行くのに身を任せる。人でなければ、神でもない。誰よりも神々に近く、誰よりも人々から遠い。それは謂わば孤高の存在。

少女は——独り。

それが、彼女であった。

馬の蹄が力強く地を蹴って砂埃を立てる。前方だけを見据えて駆ける茸毛の馬。引き締まった健脚からは強悍たる印象を受ける。律動に合わせて朱の厚総あつふさが揺れ、毛並みの良い鬘うすが振れ動く。雲珠うずで飾られた鞍は美しく、この馬が唯の馬でない事は誰の目にも明らかだった。

躍馬させると風になった様な気がして心地好い。誰よりも速く、誰よりも遠くへ、風の様あぶみに奔って行ける様な気がするのだ。鞍から少し離れて左右の脚を開き、鏡あぶみの上に立って膝で馬の反動を抜く。鏑かぶらや矢を番えた滋藤弓しげとうゆみを構えると、体を前方へ倒して胸を反らせた。狙うのは、馬場に設けられた三つの板的。腰で体の平衡を保たせ、息をする様な動作で弦を引く。矢筈やのが頬の横で直線を描き、雁俣かりまたが視線の先を向く。撓らせた弓を解き放つとひゅると鏑が啼き、廻時、とん、という固い音と共に矢が的に当たった。

命中、と思う間も無く次の的に迫る。馬の律動に合わせて呼吸をし、右の手ですつとえびら箠から次の矢を引き抜く。視線を鋭くして己の左を見据え、弓を引いて勢い良く鏑矢を放つ。再び、ひゅるとん、と聞き慣れた音が耳に届いた。そして、残る板的は一つ。



新しい矢を背中の方から取り、滋藤弓にさっと番える。的を射ようと狙いを定めるのではない。唯、呼吸に合わせて弓を引けば良いのだ。そうして射れば矢は笛の様な音を響かせながら宙を駆け、引き寄せられる様にしているのに向かう。三度目になる、とん、という音が馬場に響いて、最後の矢も的に直撃した事が分かった。

ふう、と軽く息を吐きながら、左右の膝を閉じて鞍橋の方に寄る。左に握ったしなやかな弓を腰元の辺りに下ろして持つと、賢い此の馬には主の意図が伝わったのだろう、徐々に駆ける速度を落としながら誇らしげに嘶いた。そんな愛馬の様子にくすりと笑い、空いた右手でその首を軽く撫でてやる。すると、馬は嬉しそうに目を細めた。

「紫蘭様！」

その時背後から名前を呼ばれ、ぱたぱたと駆けて来る足音が聞こえた。手綱を取って操り、馬の方向を変える。振り返った先にいたのは、宮に扈從し雑務をこなす、豎子と呼ばれる童子だった。

「紫蘭様、朗報です！」

「どうしたの、日明ひすき。そんなに急いで」

馬を止めて豎子に問うと、幼い彼はあどけない笑みを湛えて此方を見上げる。

「明後日、春宮がお帰りになるそうです」

「兄上が？それは、つまり……」

「はい！論鶴殿は本日お戻りとのことだ」

言って童子は顔を綻ばせる。その表情はまるで、待ち侘びた兄の帰還を知らされた、弟の様だった。

昔から騎射は紫蘭の趣味だった。何時の日からか、上背も、歩幅も、剣術も、槍術も、気が付けば論鶴には敵わなくなっていた。しかし、騎射だけは別だ。今も未だ、馬術と弓術では負ける気がしない。負けたくはないという矜持があるから、余程の事がなければ

ば紫蘭が鍛練を怠る事はなかった。

「紫蘭様は、戦にでられたことはあるのですか？」

紫蘭に尋ねたのは日明だった。その手には美しく咲き誇る百合の花を持っている。これを紫蘭の髻華うづにするという事らしい。紫蘭はそれを受け取り、ずっと自分の髪に挿す。そろそろ此方に論鶴が姿を現す筈である。

「戦線の後方にいた事はあるけど、実戦を経験した事はないの。兄上がそれを許さないから」

「そうですね。殿下にとって紫蘭様は大切な妹君ですから」

日明には身寄りがない。父は漁に出て遭難し、母は病で亡くなったのだと聞いている。幼い頃より様々な苦勞を経験しているからだろうか、日明は時折歳に不相応な落ち着きを見せる事があった。

「でも、皇女みこはその職責を果たしてこそその皇女でしょう？皇女に生まれたからというだけで責務を果たさなければ、此の志紀しきの国に生きる人は誰も私に傳かない。それなの

に兄上は私を甘やかし過ぎだと思おうの」

「それは違うと、ぼくは思いますよ。きつと、この志紀に紫蘭様を悪く思う人なんていません。だって、みんな、紫蘭様がどんなに志紀を想っているか、知っているから。例えば、紫蘭様はずっと貧民窟をなくそうと努力していらっしやる。刀を振るわなくても、いつも民会で戦っていらっしやるじゃないですか。それに、紫蘭様はこんなぼくにもとても良くして下さるんです。紫蘭様はぼくたちにとって自慢の姫宮様ですよ」

日明が此処に来たのは、もう一年近く前の事になるだろう。天涯孤独の身となって途方にくれていたところを論鶴に拾われ、こうして紫蘭の許で働く豎子となった。その数か月前、珠洲の託宣を受けて前線に送り出された論鶴が、都に帰還した時に連れていたのが見知らぬ童だったのだから、当時紫蘭が掛ける言葉に窮した事は想像に難くない。

「有難う。お世辞でも嬉しい」

「お世辞なんかじゃなくて、ぼくの本心ですよ」

「そう……有難う。でも、やっぱり一度でも良いから前線に出てみたい。私はもっと色々

なものを此の目に焼き付けておきたいの。それに、隣国末羅<sup>まつら</sup>の皇女は先の戦いで薙刀を手に先鋒を務めたそうじゃない？末羅の姫宮には許されて、私に許されないのはおかしいと思う」

「そうおっしゃらないで、紫蘭様。春宮は紫蘭様のことがとっても大事なんですから。それに、ゆ——」

論鶴殿も、と言いかげ、日明はそれ以上言葉を発する事が出来なかった。突然何者かが現れ、後ろから手で口を塞がれてしまったのだ。何者か、と日明の背中に冷汗が流れる。どんな事態になろうと、紫蘭に危害が及ぶような事だけはあってはならない。論鶴の留守を護らなければ、と思ったところで、日明の耳に聞き慣れた声が届いた。

「余計な事は言わなくていいぞ、日明」

声を低くして言われ、日明は瞠目する。その向こうにいる紫蘭も同じように目を見開いて、日明の後ろに立つ人物を凝視していた。

「それから紫蘭、頼むから末羅の姫宮の話はしないでくれ。あんな恐ろしい人とは正

直もう二度と関わり合いになりたくない」

苦笑する様にしながら言うその人は、間違いなく論鶴である。紫蘭はほっと安堵の溜息を漏らし、それから、すっと柳眉を寄せて顔を顰めた。

「論鶴。言わなきゃいけない事、忘れてない？」

「ん——ただいま」

こぼこぼ、と湯が軽やかな音を立てる。柄杓を持つ紫蘭の手は指先まで揃えられており、その一挙一動全てから気品が漂う様だ。相変わらず美しい、と日明は思う。馬上で弓を引く姿からは想像もつかない、紫蘭の淑やかな手付き。鼻を擽る微かな百合の香りが、何とも言えず心地好い。

「それで、日明。こっちでの暮らしはどうだっ」

「上々です。紫蘭様はとてもお優しく、本当に良くして頂いています」

「本当か？紫蘭に無理矢理そう言わされてないか？辛かったら遠慮せず言っていんだぞ」

「……日明、さあ、二人でお茶を頂きましようか」

「悪かった悪かった、冗談だよ。だからそんな事言わないでくれ」

とん、と日明の前に碗を置いて紫蘭が淡泊な声で言う、紫蘭が淹れる茶は誰のものよりも美味しい事を知っている、論鶴は慌てた様子で紫蘭に謝る。紫蘭は軽く論鶴を睨め付けるが、その一方で、その手は論鶴に茶を淹れる為、柄杓で湯を掬っている。そんな二人の様子に小さく笑い、日明は掛け替えのないささやかな幸せを噛み締めた。

「本当のことですよ。ぼくは果報者なんです。論鶴殿と紫蘭様に出会えた事、それ以上の幸せはありません」

「嬉しい事を言ってくれる」

「本当にね。有難う、日明」

論鶴と紫蘭に言われ、日明はふるふると首を振って「とんでもない」と返す。今日の日明にとって、論鶴と紫蘭は家族にも等しい存在だった。

「お二人と共にいられてぼくはとても幸せだから、いつか恩返しをしたいと思うんです。与えられた幸せを、ぼくもだれかに分けてあげたい。お二人みたいに、幸せを与えられる人になりたい。そうすることが、お二人へのなによりもの恩返しになるんじゃないかと思って」

「それで、この頃あんなに頑張って勉強をしていたの？」

「勉強？日明が？」

紫蘭の言葉に論鶴が訝しげな顔をする。うん、と一つ紫蘭が頷き、日明は俯きがちにくしゃりと笑った。

「勉強というほどのことじゃないんです。やっと満足に読み書きできるようになってきたくらいです。でも、今まで知りもしなかったことを色々知って、なんていうか、ちょっと、嬉しいんです。たとえば、世界は天と地に分かれていて、神々と人々は隔てられて

いるけれど、この世界のどこかにいる神子様みこが、いつでもぼくたちと神々とを繋いでいて下さること。ぼく、ここに来るまでそんな事全然知らなくて。自分が生きている世界のこともよく知らなかったんだ、って思ったら、なんだか寂しい気もしたんですけど、なにより、もっと色々な事を知りたくなかったです」

はにかむ日明に「そうか」と言って、論鶴は軽く、ぽん、と日明の頭に手を乗せる。そしてくしゃくしゃとその小さな頭を撫でると、暫く見ない間に随分と大人になったみたいだな、とからかう様にして笑った。

「待って下さいね、紫蘭様。その内ぼくは一人でも紫蘭様を護れるくらい強く賢くなってみせますから」

「あらあら頼もしい」

「前言撤回。生意気だな」

紫蘭はくすくすと笑みを零し、論鶴は眉を顰めて渋い顔をする。何時までもこんな穏やかな時が続けばいい、と日明は幼心にそんな事を思う。いや、きっとこんな日々が続

くに違いないのだ、と、何の根拠もなく、しかし何処か確信に近い思いを抱いていた。

「……………あ、そうだ。論鶴、さっき話していた末羅の皇女の事だけど、何かあったの？もう関わり合いになりたくない、だなんて」

紫蘭がふとした疑問を論鶴にぶつける。すると論鶴はびたりと動きを止め、それから長々と溜息を吐く。肩を落として心底嫌そうな顔をする論鶴は紫蘭もあまり見た事がなく、余程の事があったのだろうと想像させられた。

「末羅の姫宮……………あれは一種の厄災だ」

「でも、末羅が此度志紀と手を結んでくれたのは、皇女が末羅の議会に働きかけたからではないの？」

「まあ、確かにそうなんだが」

論鶴は言葉を選ぶのに慎重になり、語尾を濁して言い淀む。

「あの人は強くて賢い女性ひとだ。だがそれ故、厄介なんだ」

言って論鶴はまた嘆息する。どういう意味か、と問い質す様な眸で紫蘭が見据えると、

諭鶴は言い難そうに視線を惑わせる。しかし、数秒の後に再び大きな溜息を漏らすと、諦めたかの様に口を開いた。

「志紀に嫁いでくるんだ。その、姫宮が」

一瞬、言われた事の意味が分からず、紫蘭はぱちぱちと目を瞬かせた。それから、皇女が、志紀に、と譚言の様に眩き、もしかして、とある一つの可能性に辿り着く。ひよつとして、兄上は、と恐る恐る諭鶴に問い掛けると、諭鶴はこくりと肯いた。

「春宮は末羅と同盟を組む心算でいらっしゃる。その同盟関係を強める為には、両家の婚姻が必要だと、そう仰っていた」

「でも、そんなの、こんな突然……保守派の長老達が絶対に反発する」

「そうだ、だから難しい。だが、末羅としては此の同盟、そして婚礼に異論はないそうだが、寧ろ、そうするのが良い、と」

諭鶴の口調に、紫蘭は何か違うものを感じる。そして、そうか、そういう事か、と思いい、紫蘭は静かに言葉を発した。

「——お互い惹かれてるのね、兄上と末羅の皇女は」

紫蘭がゆっくりと言うと、諭鶴はいくらか戸惑う様に視線を逸らし、それから、多分、いや、絶対、それもかなり、と苦々しげに口端から言葉を絞り出す。どうやら末羅の皇女は本当に相気丈な人らしい、ここまで諭鶴が嫌がるのを見るとは、と、紫蘭は困った様に眉尻を下げて小さく笑った。

「そう。なら、お二人には幸せになって頂かないと」

春宮が選んだ人なら間違いはないだろう、と紫蘭は思う。そうする事を皇子（みこ）が決めたというのなら、幸せになってもらわないと紫蘭が困る。紫蘭にとって、春宮は嗣君である以上に、掛け替えのない兄なのだから。

「まずは父上に奏上して、それからお祖母様のところへ行かなくちゃ。御託宣を授けて頂ければ、長老達も黙るしかないもの」

ね、諭鶴、一緒に来て、と、諭鶴が嫌がっている事を承知で紫蘭は言う。対する諭鶴は些か考え込む様にした後、すっと紫蘭と視線を交差させる。そしてわざとらしく肩を

疎めて見せると、分かったよ、と言いながらひらひらと手を振った。

+ + +

少女はふと、息を呑んだ。

呼吸の方法を忘れたかの様に動きを止め、唯々目の鏡を見遣る。心に宿ったのは憧憬にも似た寂寞感。ぽっかりと胸に穴が開いてしまった様に感じてしまう。ぐ、と締め付けられる様な苦しさを覚え、少女は慌てて呼吸を再開させる。すう、と流れ込んで来る空気が、何処か冷たく感じられた。

「わたし、は」

少女は薄紅色の唇の間から小さく言葉を漏らす。たどたどしいその口調は赤子の様で、しんとした社祠の中に短い一言が木霊した。

「——私は、」

もう一度そう繰り返して、少女は己の掌<sup>たなごころ</sup>を見詰めた。白く滑らかで嬾やかな此の両の手。しかしこの手は何て冷たいのだろう。何て虚しいのだろう。何て、哀しいのだろう。

独りなのだ、と少女は思った。初めて彼女は孤独を知り、孤独を感じた。だがしかし、そんな事を今更悟ったところで何にも成りはしない。所詮人の手では運命を変える事など出来やしないのに、と、少女は厭倦とした様な表情で溜息を零した。

押し潰される様な重厚な空気が辺り一面を満たしている。前にも、後ろにも、そして左右にも感じる幾つもの目。跪拝したままの背中に鋭い視線が突き刺さる。これは試されているのだ。臆してはならない。ごくりと唾を呑んで一度大きく呼吸をすると、ぐ、と力強く顔を上げた。視線を逸らさず、動揺を見せず、惑いの無い貌を眼前に向ける。すると、その視軸の先に在る椅子に腰を下ろした人物は、ふ、と周囲には悟られない様に微かに笑みを浮かべ、ゆっくりと立ち上がった。

するり、するり、と、目の前の人物は滑る様に穏やかに近付いて来る。僅かに目を伏せ、両の手を頭上にやりながら前へ出す。そして、目の前の人物がぴたりと足を止めると、やや間を置いて、ずしりとした重みが掌上に加わった。手渡されたのは長飾が施された飾

太刀だ。深々と頭を垂れて其れをしっかりと掲げると、何処か身の引き締まる様な思いがした。

おめでどう、と紫蘭に言われ、論鶴は短く、ああ、と返す。すると横から脇をどんと突かれる気配がし、論鶴は反射的に後ろへ身を引いた。びくびくと嵯谷を引き攀らせながら隣に目を遣ると、澄ました表情で微笑む女性が其処に居た。

「論鶴、折角紫蘭が祝ってくれたのに、その言草はないでしょう。紫蘭に対して失礼というものではありませんか」

にっこりと端正な笑みを浮かべて言われ、論鶴は何も言い返せずに口籠る。すると、見計らったかの様にして紫蘭が言を発した。

「お氣遣い有難う御座います、お義姉様。でも、論鶴は何時もこうなので、あまりお



気になさらないで下さい」

「あら、論鶴は何時も紫蘭に対してこうなのですか？女性に対してそれはあんまりですわね」

ふふふ、と相変わらず一寸の隙も無い美しい微笑みを向けられ、論鶴は相手には聞かない様に小さく息を吐いた。彼女の笑みはあまりに整って美しく、歪なものが何も含まれていない。だからこそ逆に空恐ろしい。一年と半年程前、彼女が志紀へ興入れする事になった折、確りと護衛をしてしまった事が今では悔やまれる。

「……大変失礼致しました。今後皆様方の期待に応えられる様精一杯精進して参りますので、何卒宜しくお願い致します」

この二人には楯突かない方が良い、と判断した論鶴は、わざとらしい口調で言って大仰に頭を下げる。そんな論鶴の様子に紫蘭はくすくすと笑い、袖元から小さな袋を取り出すと、それを論鶴の掌に乗せた。

「これは私からのお祝い。中に白檀と竜腦、それから丁子と麝香を入れておいたの。ね、

良い香りがするでしょう？位が上がれば責任も増す。疲れる事も増えると思うけど、ちゃんと休んでね」

ふわりと笑んで言う紫蘭に、論鶴はふっと頬を緩める。今度こそは素直に有難う、と言うと、論鶴は受け取った小袋を胸元に仕舞い込んだ。

先程下賜された太刀の重みが未だにずしりと感じられる。論鶴は己の手をじっと見詰めて、この手で護れるだろうか、と胸中で自問する。最後まで何かの為に戦い続けられるだろうか。大切な人達の為に、歩みを止めずにいられるだろうか。そう考え、論鶴はふと自嘲する様に小さく笑う。違う、そうではないのだ。何かあっても進み続けるより他にはない。だから、進むのだ。だから、護るのだ。

そう、思った、時だった。

ふわり、と紫蘭の柔らかな髪が舞い、衣に焼き染められた香が辺りに散る。論鶴は一瞬事態を把握出来ずに息を呑んだが、考えるよりも先に体が動いていた。

「紫蘭！」

突如崩れ落ちる様にして倒れた紫蘭を抱き留め、諭鶴はその名を呼びながら紫蘭の顔を覗き込む。諭鶴の腕に抱えられた紫蘭は瞳を閉じ、血の気のない青白い顔をしている。辛うじて呼吸をしている事だけは分かるが、諭鶴がもう一度その名を呼んでも、固く閉ざされたその瞼は開かない。

何が起こったのか、諭鶴には一切分からない。唯、早く医師に診せなくては、と思い、紫蘭の体を抱き上げる。分かっているのは、突然紫蘭が意識を失い倒れた、という事だけだった。

譬えるならばそれは、日の沈んだ後の海岸を一人で走っている様な気分だった。視界が開けない、足元の不確かな途を、唯一人で走っている。そんな気分だ。言い様のない不安と焦燥に駆られる。波に足を浸わってしまったらどうしよう、そうならない様に早

くこの先に行かなければ。足場の悪い海岸を唯只管に奔り続ける。嗚呼、と嘆息してか  
ら息を吸うと、何処からか自然に「お祖母様」という呟きが零れた。

ふるりと紫蘭の長い睫が震えた。意識が戻ったか、と諭鶴は御帳台の脇から紫蘭の顔を覗き込む。宮の医師には先程、何よりもまず安静にしている様に、と言われ、何かの病だとか、そういった類のものではないと判断されたところだ。けれども、逸る諭鶴はひっそりと紫蘭の頬に指を伸ばす。そして、僅かにその指先が紫蘭の肌に触れた時、紫蘭ははっと目を見開いた。

諭鶴は驚き、しかし同時に安堵する。そして、起きたか、と声を掛けようとすると、それよりも早く紫蘭は上体を起こして口を開いた。

「…………おばあさまが」

掠れた声で紫蘭はそう呟く。状況が呑み込めない諭鶴が、え、と問い返すと、紫蘭はまるでその言葉しか知らないかの様に、おばあさま、おばあさま、と繰り返し、ぼろぼろと玉の様な雫を眸から溢れさせる。珠洲様がどうかしたのか、と諭鶴が問い掛けても紫蘭は一切答える様子がない。唯、細い声で珠洲を只管に呼び続け、頰れる様子にもう一度眠った。

遠くから、哀弔の調べが聞こえてくる。胸の奥に沁み入って溶け込む様な、透き通って哀しげな音律だ。共鳴する風の音までも切なく響く。珠洲の訃報は直ぐさま都中に広まった。何時でもあの社祠の主として凜としていた珠洲の死は、誰にも予想し得ない事であった。

「私ね、諭鶴、決めたの。お祖母様の後を継ごうと思う」

想像していた通りの紫蘭の言葉に、諭鶴はきつく唇を噛み締める。紫蘭が求めるものは何よりも伸びやかな日々であると感じているから、紫蘭にその選択だけはさせたくなかった。そうは言っても、諭鶴には何もする事は出来ない。己の非力さがもどかしく、己の無力さが憎い。

「今、それが出来るのは私しかない。だから、社祠に入る決心をしたの。潔斎をし、志紀の為、社に仕える。神子みこが人々と神々を繋ぐ存在なら、私は神子と人々を繋ぐ皇女みこになるわ」

睫の下に覗く紫蘭の双眸には、未だ揺れ動く躊躇と葛藤が見え隠れする。紫蘭が見せまいとしても諭鶴には分かってしまう。それ程に長い間、諭鶴は紫蘭の傍に居た。

社祠に奉仕するのは未婚の皇女と決まっている。年齢を鑑みても、現在珠洲の後任として相応しいのは紫蘭しかない。それは客観的な事実だが、その選択を心から望んではいないのは、諭鶴も紫蘭も同じだった。

「だから、私達……」

言って、紫蘭の眸に涙が薄らと滲む。鼻の奥がつんと痛むのを抑え込み、紫蘭は言葉を絞り出す。そうするより他には、どうしようもないのだ。

「もう、今の儘ではいられない」

震える声で紫蘭が言う。論鶴は平静に、そうだな、と応えようとして、何時も通りの声を出す事に失敗した。紫蘭も勿論、其の不自然さに気が付く。だがしかし、二人は敢えて其処から目を逸らした。

社祠に入るといふ事は、生涯社に縛り付けられるという事だ。命の灯が消え果てるまで神事を司り、鼓動が止まるその時まで社を離れられない。それは間違いなく紫蘭にとって苛烈な選択であるけれど、誰かがその責務を果たさなければならぬのも、また変わらぬ事実であった。

「それだけ、ちゃんと言おうと思って……だから」

じゃあね、と言って紫蘭は気まずそうに言葉を濁し、踵を返して論鶴に背を向けた。後ろ髪を引かれる思いを感じて紫蘭はそこで立ち止まるが、大きく呼吸をすると、意を

決して回廊の向こうへ立ち去ろうとする。紫蘭の衣から届く香が薄れていく。論鶴は咄嗟に腕を伸ばし、気付けば紫蘭の手首を掴んでいた。

あ、と、間の抜けた声が論鶴の口から零れる。自分でも意図していなかった行動にどうすれば良いのか分からなくなる。一体何をやっているのだ、と己を咎め、論鶴は腕を引こうとする。けれど、何故か自身の意思に反して手が紫蘭を離しはしない。論鶴は、嗚呼、と胸臆で嘆息した。

「……紫蘭」

静かに名を呼ぶと、紫蘭は恐る恐るといった風に論鶴の方を振り返った。不安定な二人の視線が其処でぶつかる。痛みを押し隠して独り抱える様な色をした紫蘭の眸を見ているのは、論鶴にはどうにも耐えられなかった。

「本当に、それで良いのか。後悔はないのか」

論鶴は問う。すると、ぐらりと紫蘭の瞳が揺れた。薄桃色の唇が微かに震え、小さな手は拳を握り、その爪が紫蘭自身の掌に突き立てられる。紫蘭は表情を歪ませ、論鶴を

正面から見据えた。

「後悔しない訳、ないじゃない!」

どん、とその拳が論鶴の胸元に叩き付けられる。大して強い力ではない。けれど、きりきりと締め付けられる様に胸が痛い。論鶴が何も言えないでいると、もう一度紫蘭の拳が、どん、と当たった。

「これが最高の選択なんかじゃない!ぎりぎりの、最善だと思える選択をしただけよ!私だって、出来る事なら自由に生きたい!でも、でも、誰かが果たさなきゃいけない役目なんかも!私がそうするしかないんだもの!」

紫蘭の声に涙が滲む。論鶴はそっと紫蘭の後頭部に手を遣り、その顔を自分の肩に押し当てる。此の涙は見てはいけない、と思う。きっと紫蘭は見られたくないだろう、と、そう思った。

「どちらを選んでも、きっと私は後悔する。それなら後悔の小さい方を選ぼうと思ったの。この選択は志紀を揺るがすものだから、私は……逃げちゃいけない!」

くぐもった声が耳元で聞こえる。論鶴は何も言わず紫蘭の頭をそっと撫で、もう片方の手でその小さな背中を静かに擦る。押し殺した様な嗚咽が論鶴の鼓膜を震わせる。論鶴は再び唇を噛むと、紫蘭の耳元に唇を寄せた。

「——紫蘭」

名を呼べば、紫蘭の肩がびくりと跳ねる。もうどれだけの時間を二人で過ごしてきただろう。何があっても紫蘭を護ろうと誓った、あの時の想いは、今でも論鶴の中にはっきりと残っている。

「紫蘭、泣いていい。見ないでやるから、聞かないでやるから、喚いて良いんだ。それを隠すな。押し留めるな。飲み込もうとすれば、きっと紫蘭が潰れる。泣いていいんだ。だって……紫蘭は、独りじゃないだろう!」

紫蘭の肩が震えるのが分かる。論鶴はそれを宥める様に背を擦り、ぼんぼん、と軽く紫蘭の頭を叩いた。

「何があったって俺が紫蘭を独りにはさせない。一人でも、独りじゃないんだ。俺達は、

弱いから、独りではとても生きてはいけなから、だから——共に歩こう」

ほん、ともう一度諭鶴は紫蘭の頭を叩く。すると、肩の方から小さく、馬鹿、という声が目まで届いた。その言葉に諭鶴が小さく笑うと、今度は、有難う、と、琴線に触れる様な、そんな調べが聞こえた。

+ + +

眩暈がする、と少女は思った。

疎ましい程に美しい。恨めしい程に麗しい。胸が締め付けられる様な苦しさと共にあ

る温かさを、少女はこの時初めて知った。そう、知ってしまったのだ。その眩さを。その、愛しさを。

どくん、と心臓が跳ねる音を耳の奥で聞く。体中の脈が波打ち、熱い何か爪先から旋毛まで駆け巡る。呼吸が乱れて苦しい。少女はぎゅっと己の胸元を掴み、嗚呼、と掠れた声を口端から溢す。もう後戻りは出来ないのだと、少女には分かってしまった。

ふと、少女は首を巡らして辺りを見回す。固く閉ざされたこの社祠。外界からの侵入も、内界からの逃亡も、此処では決して許されない。少女が知る限り未だかつて一度も開かれた事のない社の戸は、今も尚少女の背後で厳粛たる雰囲気を放っている。

少女はきつく唇を噛み締め、拳を握った。どくんどくと鼓動が響き、手足が痺れる様な感覚を覚える。けれど少女は己が内から突き上げてくる思いをどうする事も出来ず、ゆっくりと振り返って戸口に向き合った。

すう、と息を吸い込み、少女は躊躇いがちに一歩足を進める。踏み出した右足が痺れる様に疼き、足先に炎が点いたかの如く熱が迫り上がって来る。焼ける様だ、と思いな

がらも、少女はもう退く事は出来なかった。

そして少女は眼前を見据え、更にもう一つ歩を進めた。じわりじわりと何か競り上がってくるのが分かる。この一步が如何に大きな意味を孕んでいるのか、少女は充分に理解していた。しかし、たとえそれが禁忌だったとしても、彼女には最早そんな呪縛は通用しない。彼女は気付いてしまったのだ。己に欠けているものの存在に。欠けたる処の無いが故に、決して手に入れられないものの存在に。

つ、と少女は腕を伸ばす。白く細い腕は華奢ではあるが、その動きには確固たる意志が窺える。少女はそのまま一步を踏み出し、閉じられた社祠の門戸を押しした。ぎぎい、と木材が軋む様な音を立て、扉は少女に諫言する。しかし、少女はもう躊躇う事をしなかった。

さあ、と風が吹いて、少女の髪を揺らす。決然と戸を開け放った少女は、思わず其処で動きを止める。此れが世界なのか、と、胸臆から何かが込み上げて来て、熱い雫が頬を伝った。そこで少女は咽喉が焼けて貼り付くのを感じ、唐突に噎せて上体を屈める。

苦しい。呼吸が上手く出来ない。軀命が悲鳴を上げているのだ。どうか耐えて、と少女は己に願う。こんな処で終わる訳にはいかない。鉛の様にずっしりと重みを増した四肢を必死の思いで動かすと、少女は転がり落ちる様にして社祠を取り囲む森へと出た。

何て広い、と少女は思う。日々鏡の向こうに見ていた世界は、恐らくこんなに広くはなかった。けれど此処はこれ程までに広い。少女はしっかりと己の双眸で其処に広がる光景を捉えていた。そして、少女は走り出す。何処へ向かう訳でもない。唯、己が意思の赴くままに、彼女は噎せ返る様な緑の中を走った。

彼女は人ではなかった。神でもなかった。人々と神々の間に存在する、とても曖昧な存在だった。人を美しいと思った事など一度たりともなかった。少女にとって人は観察の対象であり、また、施与の対象でしかなかったからだ。少女は独りで生きた。独りで生きる事が出来た。独りで生きられる程に、少女は人から遠かった。其れが今、彼女には、痛い。

少女は走る。奔る。趨る。鳶に足を取られても、棘に腕を切られても、構う事なく少

女は走る。聽て少女は森の中を横切る一筋の流れに辿り着いた。此れが川というものか、  
と思ひながら其方へ近付くと、少女は草木に行く手を阻まれて体勢を崩し、地に向かっ  
てふらりと倒れ込んだ。咽喉が塞がり、激しく咳き込む、もう限界が近い、と少女は悟  
る。人の世の空気は彼女にとっては毒だ。内側から徐々に蝕み、彼女を朽ち果てさせて  
いく。此の世に生を受ける前に命の焔を消してしまった彼女は、神々に課せられた職責  
を果たす事によって命を繋いでいた。故に、社を出て此処で生きる事は儘ならない。

一艘の舟がある。ふと少女は顔を上げ、視線の先に小舟を見付けた。或いは、此れに乗っ  
て何処かへ行けたら。少女は脚を引き摺って舟の方へと寄り、独力では支え切れなくなっ  
た軀を其れに預けた。意識が判然としない。まるで存在が薄れていくかの様だ。少女は  
残された僅かな力を振り絞り、舟の舳先に文字を刻んだ。

命の焔は次第に小さくなっていく。少女は力を使い果たし、動かなくなった体を舟の  
中に横たえた。見上げた先には立ち並ぶ木々がある。すう、と肺に空気を吸い込むと、  
少女は掠れた声で詩を紡ぐ。すると、ごん、と舟が動き出したのを感じた。少女は微

かな声で詠う。その詩は神々の詩とは違う。彼女自身の心の内から溢れ出た、彼女自身  
の詩であった。

此の儘流れに任せて何処へでも行こう、と少女は思う。どうせこの命は長くはもたな  
いし、何処か特定の処に行きたい訳でもない。だから、最期にゆらりゆらりと揺られて  
みよう、そうして此の静謐が満たす世界を出て行こう。少女は川を流れる舟の上で、先  
程舳先に刻んだ言葉を胸内で繰り返しながら、静かに詩を口遊む。

——私は、生きた。



空が泣いている。

女はふと、檐から斜め上を仰いだ。重苦しい鈍色の雲が頭上を支配している。風が吹いては女の袍を揺らし、雨が激しく地に叩き付けられる。酷い天候だ、と内心で呟き、女は小さく溜息を漏らした。

「紫蘭様、御身が冷えてしまいます。どうか中へお入り下さい」

声を掛けられ、女は振り返った。背後の社祠では心配そうな顔をした侍女が衣を手に立っている。女は、そうね、と返して微笑み、曇天に背を向けて社の方に向き直った。ぴちゃり、と雫が跳ねる音がする。女はふと立ち止まり、違う、そうではない、と気が付いた。此れは空が泣いているのではない。空が楽を奏でているのだ。足を止め、瞳

を閉じ、そっと耳を澄まして辺りの音を聞く。哀しくとも愛しい、心に響く独特の調べだ。その調べに乗って何処かからか詩が耳に届き、女ははらりと涙を流した。

貴女はとても美しかった。そう詠う様に言って、女はすっと脛を開いた。

了

アーサー王研究会創作文庫

聯璧の詩<sup>うた</sup>

著者 藤田眞実

2011年 1月 7日 発行

発行人 不破有理

発行所 慶應義塾大学 アーサー王研究会

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学来往舎1階 代表 045-563-1151

©2011 FUJITA, Masami Printed in Japan

非売品